

西里 勇 にしごと いさむ（池間漁協）

1933 年(昭和 8 年)、宮古島平良池間に生まれる。80 歳(2013 年時)。

勇猛果敢な池間漁師である。18,9 歳(1951,2 年)には尖閣諸島に出漁し、27,8 歳(1960,61 年)まで、深海一本釣り、曳き縄漁に従事している。尖閣には「魚を釣りにではなく、積みに行った」と、当時の尖閣が魚の宝庫だったと語っている。また氏の語るコウビトウでの体験や長嶺老人との芋畑、鳥の羽毛採りなどの話も興味深く、貴重なものである。米軍が戦中に撮影した同島の写真に、何と氏が寝起きして遊んだという不時着機が写っていた。



終戦直後 尖閣へ 一本釣りで

僕は 18,9 の歳、学校を卒業してすぐ尖閣列島へ行った。その前には先輩なんかはいっぱい行っている、何年も前から行っている。僕が最初に行ったのは第三瑞光丸(2.3 ト)という小さな船で行った。深海一本釣をしに行った。手繰りでマチ、タマン類などだが、潮の強い時は、曳き縄でシマガツオ、マンビキ、サワラとかをよく釣っていた。

向こうは潮のいい時はカジキとかも来るからねえ。潮のいい時は深海のマチを釣って、潮がよくなかったら、曳き縄でシマガツオとか、サワラとか、シイラとかを釣っていた。クバシマ(魚釣島)は、あんまり一本釣は食いつきが悪い、向こうは下は泥だから。コウビトウ(黄尾島 黄尾嶼、久場島の意)は、一本釣の魚もよく食うよ。

あの頃の船は遅いから、14,5 時間位かかっていたねえ、それに氷がない時代だから、午後 3 時頃には、池間を出て、向こうに夜船を走らして行くさあねえ。朝早く着いて漁をして、魚釣ったら、そのまま引き返した。商売しておったから、だから朝から漁をやって、沢山釣れたら、昼 3 時頃には、もう、離れんと朝の市場に間に合わなかった。それに朝 8 時の定期船で魚を平良に送っていたりしていたから。

向こうでは、漁が少ない時は、もう釣った魚を炊いて、船の上で少しおかずして食べた、もう残りは捨てて、また明日朝早くから釣るというやり方だった。沢山釣れることは釣れたけど、あんまり儲けはなかったねえ。

コウビトウでは 不時着のゼロ戦機で 遊んだ

あの頃、漁がない時、相棒と 2 人でよくコウビトウに上陸した。そしたら、飛行機があった。燃料不足で降りた飛行機よ、ゼロ式戦闘機かねえ？、一人乗りで、日の丸がはっきり付いていた。丁度向こうの芋畑の真ん中位に落ちていたねえ。芋畑は、部落の屋敷跡がある所のずっと上った所に、屋敷のある所からつないでいて、そこからずっと東側に相当あったよ、だから飛行機は屋敷跡の所から見えていたから。芋畑は 1 町歩(約 3000 坪)位はあったと思う、その丁度真ん中位に坐っていたから(笑い)、芋づるが後ろから相当這い上がっていたよ。そのかづらを取り外して、ゼロ戦機に乗って、遊んだがねえ。ペラー(プロペラ)まできれいにあった。相棒は僕より 1 つ下で、新城ヨシゾウとって、一昨年位に

亡くなったけど、彼とはコウビトウに何回も一緒に上がった。僕らは飛行機のある所の向こう側に、北側に上等な所があったから、向うに2,3日も寝たりして、一緒に遊んだりしたけどねえ。彼の兄貴は元気でここにいるさあ、シンコウ兄さんといって僕より2つ位下。潜りをやっていたから、尖閣にダツ獲りにも行ったはずよ。あの飛行機はジュラルミンで、なかなか腐れるものじゃないから。コウビトウのあの芋畑に、今でもあるんじゃないか。

カツオドリ捕まえて、持ってきて売る

コウビトウには何回上がった分からん。何10回も上がった。シケて、もう漁ができない時は、あの年寄りなんかは、船は風の廻る度に逃げてあるいてねえ、もう僕らは若かったから島に上がって、鳥を採って皮剥いて、2人であんなしておったから。向こうにはへビも島だから一応おるはずだけど、見たことはなかったねえ。鳥はねえ、ここではウンカー(カツオドリの意)という羽の長い、嘴が長い少し大きい奴、あれを捕って、殺して縛って、船に持って行って、毛を抜いて、皮を剥いて、裸にしてねえ。氷のない時だから潮ぶっかけて、いっぱい島に持って来て下ろしたから、昼捕って、夕方に船を走らせば、朝早く宮古に着くから、そしたら仲買人がいっぱい買いに来ておったねえ、一匹25セトで売れたよ(笑い)。もう高い物ではあるさあ、魚は釣ってきて15セト位しかなかったからねえ。1人で200羽しかできなかった。あれはきつかったねえ。それに全部殺さないといかんから怖かった。だから捕るのはすぐ止めたけど。

加那志オジー コウビトウで、鳥の羽根採り

僕らがねえ、コウビトウに行って鳥を捕って、島にも2,3日寝たことがあるよと、その話したら、長嶺加那志(カナシー)というオジーねえ、池間の人でもう亡くなっているけど、今生きていたらもう120歳位かねえ、自分は向こうに、コウビトウに行って、あの羽布団用の鳥の羽根をもう何年もやっておったと。



「コウビの方」(古賀氏のことか?)から頼まれて行って、自分は何年も向こう西南海上から見た久場島・黄尾島(高良鉄夫1968)に住んでいたよ、どこどこに住んでいたと話しておったが、そこら辺は家の形も皆ないさあ、もう戦前の話だからねえ。そのコウビトウで、加那志オジーは鳥の羽採って、こっちで足らん時は、トリシマ(南小島)に行って採ったとねえ、船もあつたらしいから、自分らが採った鳥の羽根、船が来て積んで行き、食糧は持って来て置いていった。1年分の食糧は貯えておってやっていたから別に怖くないからと。僕が、トリシマの方が鳥はいっぱいいるからいいんじゃないかと言ったら、加那志オジーは、あっちもいいけど、捕って掴まえ

るのは面倒、足場も悪いからと言うていた。トリシマは高い山や崖があるが、コウビトウは真っ直ぐさあ、多分、採りやすかったから、向こうにおったんじゃないか。

コウビトウには鳥はいっぱいおったよ、けどウンカーよりはカゴ（アジサシ類）という鳥の羽根がいいかもしれない、あれは白くて短いしねえ。ウンカーの羽根は大きくて長いけど、お腹の半分から下は白いし、きれいでもあるさあ。

コウビトウの屋敷跡 大きかった

加那志オジーは、自分の家は、芋畑の西側だったと言っていた。

向こうは家がいっぱいあったはずだよ。それも大きい家が、向こうの基礎はあれだよ。この位あるよ、でっかいよ。コンクリーやっている所は高さがあった。こんな大きいコンクリーの基礎が打たれていたのもあったから、そこは何かの工場だったんじゃないかなあ、そういう所もあって、どんな造りしていたか分からんけど、コンクリーで基礎は上等にできていたからねえ。



屋敷跡には当時使ったカメがゴロゴロ(新納義馬 1971)

向こうに墓はありましたかって、それは分からん、お墓といっても、向こうは墓か何か分からんから、西側には何んかなあ、石碑見たいなものがあつたけど。僕らは若かったから、あんなものは気が付こうとしないからねえ。

向こうは水が不便だから、大きいコンクリーでやられた所には水タンクがあった。

屋敷跡にはカメ(甕)も水がめもあつたねえ。カメには口の大きい物と小さい物があつて、昔は飲み水をやる時は大きいカメに、蓋閉めて置いておいて、あんな物でやっていたが、あんな水がめがあつちこちに転がっていたよ。

向こうはいい所ではあるさあ、加那志オジーなんかはずっとおつたわけだから、向こうの瀬で魚なんかも捕ってきて、食べたりしていたって、自分らずっと向こうにおつたと言って、あんなに敷地を上等にやる位だから、何年か生活していたはずよ。長いこと暮らしていたんじゃないかなあ。コウビトウは海水浴できそうな場所もあるさあ。南西側はきれいに下がった所もあるから、水さえあれば、大東島よりもいいはず。

芋 元々「コウビの方」が 植えた

僕が、コウビトウにあつた芋を食べた話をしたら。加那志オジーは、「自分らは脚気なつたらいかんからあの芋は作って食べていた」と言っていた。「あんなんかが植えた芋は、食べられないと言ったら、あの芋は自分んかが植えなかつた。あれは元々『コウビの方』

なんかが持ってきて植えてあるものもの」と言っていた。あの芋は大きいさあねえ、ものすごく大きい、こんなに大きい、いっぱいあるけど、これ炊いたらもう(笑い)、プカプカして美味しくない。コウビトウだったら人間は死なんよ(笑い)、もう芋がいっぱいあるからねえ。大丈夫だよ、1町歩位はあるかもしれん、1,2年で喰えんから(笑い)。

サトウキビ畑は、屋敷跡の一番南側にあったねえ、その上は、屋敷の上は、全部キビ畑だから。あれは昔の在来種だが、あれはこっちから持って行っているはず。池間にハーラーヤという所があるけど、僕らが小さい時からそこにあったのに似ていた、匂いもあれみたいだった。20号の大茎種というのは美味しかったが、あれではないさあ、小さいキビでねえ、長くなっていたよ。僕らが行った頃は5畝位、150坪位はあったかもしれない。オジーに「25号の大茎種、なぜあれを植えなかったか」と聞いたら、「向こうでは風が吹いたらなくなるから、あの小さいのが上等だ」と言っていた。多分、こっちから持って行って植えたはず。



屋敷跡近く?から掘り出した芋 (新納義馬 1979)

コウビトウで儲けて 赤瓦葺きの家造る

加那志オジーは、コウビトウに池間の仲間と一緒に、それとも自分一人行ったのか、それは分からん、自分らでも池間から行った人は、加那志オジーしか聞かないけど。オバーに聞いたら分かったはずだが、もうオバーもいないからねえ。でも沖縄から行っている人はおったんじゃないかなあ、そんな話はしている見たいだった。若い時に向こう行って相当儲けたかもしれない。オジーの家は、昔から大きな赤瓦葺きで造られていたねえ。オジーは向こうからの儲けであの家は造ったと話していた。僕らが小さい時分は皆小さいカヤブキだった。僕の本家も、僕が昭和27,8年までもカヤブキヤ(茅葺家)だよ。

池間がカツオ漁が栄えて、カツオ業の収入が出てから、赤瓦葺になったけど。

この話は、それよりずっと前のことだからねえ。あの頃は収入源はないもん。

加那志オジーはねえ、「もう、向こうに行けないからねえ」と懐かしそうにしょったよ。もっと、向こうの話、コウビトウにいた頃の話、オジーが元気なうちに、うんと聞いておけば、よかったと考えるさあ。あの時は僕らは20にもならなかった、子供だったから。

コウビトウ、アカオで、採れたのは 赤サンゴだけ

その頃、19歳位の頃(1952年)だと思うが、尖閣にサンゴがあるからとサンゴ網下ろしに行った。幸丸という11トの船で、船長は仲間ヤマさんと、長嶺金五郎さんも一緒だった。

コウビトウでサンゴ網引つ張ってみたら、本サンゴは1つも採れなかったけど。今考え

てみたらねえ、あるわけないよ、向こうには、島の西側の一本釣して魚を釣っている所を引っ張ったからねえ、したらねえ、あの赤い、柔らかいサンゴが、あれが掛ってきて、大きいのがよ、こんなにでっかい物がかかって来ていたよ、これサンゴかなあと思って、色も一緒さあねえ、そしたら違う(笑い)、もうあんなのしかなかったよ、向こうには。

だけど、北側にあるはず、北とか、東面とか、向こうの下がった所にはあるはずさあ。アカオでもやったが、赤サンゴをねえ、小さいのは採ったよ(笑い)。1日やっても一斤位しか採れない。アカオには赤サンゴの小さい奴はあることはある。それは東側だったけど、いい奴は掛からなかった、でもやってみないと分かん。あることはあるはずだ。

コウビトウにもあるかもしれんよ、向こうは。東の絶壁の所はやってみないと分かんよ。僕らが幸丸でサンゴ網下ろしていた時、台湾船はいっぱい来ていた。だが、サンゴを採っているのか、何をしているのか分からなかった、僕等は19歳位、未だ子供だったから。

サンゴブームの前に うんと儲けたよ。

1959年、宝山ソネにサンゴが発見されて、僕らが行ったのは60年だ。24,5歳の時、伸光丸(31.90ト)で最初行って、僕が機関長して、最初に行っていたから。

皆より早い時期に行ったから、うんとサンゴを採って、大部儲けたよ。

そのあと、皆は別の船で行ったからねえ、それからサンゴブーム(1962,3年)になって

あの時はサンゴ網入れる所ないで走っていたけど。もうサンゴいっぱい巻揚げて ウインチ壊して入って来た時もあったけど、あの時は尖閣列島には行かない。ここは宝山ソネを発見して、こっちだよというから、皆行ったさあ、もうメチャクチャ採れたからねえ。

一貫以上のサンゴの木なんかは何10本と揚げておったからよ。網揚げて簡単にはサンゴは外せない。棒で叩いて落として、もう残ったものだけが製品だからねえ。

だけど、最後に行った時には金にはならないなあと思ったねえ。もう殆んど枝サンゴ採っている見たいにデタラメに揚がったからねえ、これでは金にならないと思った。もう、いじって、恰好の悪いものは、海に捨てて、また採ってきて、捨てて、あるもの持ってきて、ハンマー叩いて割ってみたりして、あんなしていた。もうサンゴは金にならないと思ったから、カツオ船に切り替えて、サンゴ採らんでカツオを獲ったさあ。

そのあと皆も、サンゴはもう採れないからと辞めていたけど。

尖閣で、狙ったのは 深海のマチ類

僕が尖閣列島に行ったのは18,9歳から27,8歳位まで、もう30歳には、南方カツオ漁に行っていたからねえ。あっちでやったのは、主に深海一本釣、マチ釣ですな。

当時は、宮古近海でも魚は釣れたが、尖閣列島付近はいっぱい釣れたねえ。

だけど、クバシマ(魚釣島)とか、トリシマ(南小島)付近は、あんまり良い魚ではない。

アコウとかの東側の魚はいい魚だ。皆、マチを狙っていた、アカマチとかを。コウビトウの東の絶壁なんか、あんな所へ行かんと釣れなかったから、もうクバシマから北になれ

ば、向こうはもう海じゃない、一本釣りの場所じゃない、向こうは浅いから。皆泥ですよ、東シナ海の泥だ、サバとか、サンマとかあんなものしかない。浅瀬だから、もう向こうに行ったら何もしない(笑い)。

(海図を指で示しながら)ここになるともう泥よ、浅くして一本釣には向かない。クバシマから東側でなければ、一本釣はできなかった。一本釣はマチ狙い、マチとかシロダイ、シロダイは、殆んどシケた時に、島の周辺にいる、深い所にいないからねえ。向こうまで行ったら、深海のマチ狙いしかやらなかった。浅い所だったらシロタマンとか、ミーバイ(フエフケ類)とか、あんなものがいっぱいいて、よく釣れたけどねえ。

あの当時はミーバイなんか買う人いなかった(笑い)。今は美味しくて高いけど、もう誰も買わなかったからセリにはやらなかった。持ってきて、自分で食べるおかずにする位、だから、あんまり釣らなかったねえ。

魚を釣りにではなく、積みに行く

漁場は色々だったけど、コウビトウの近辺やったり、またクバシマの東側か、南側の向こうの下がった所、西側は全然ダメですよ。東シナ海側は、浅いからねえ。もう泥になっていい魚は釣れなかったから。もう潮の強い時に向うに上がって、曳き縄で、シマガツオとか、サワラとか、あんなの釣っていたけど。アカオには丁度東に行った所に、マチの食うポイントがいっぱいありますよ、向こうには僕等が行った頃は 2,3 時間釣って、すぐ引き返していたからねえ。深海は 1 本釣りでやるから、大きい魚のポイントに行けば、もう下ろしたら 1 回に 20 疋、30 疋は揚がるねえ。もう何回もやらないうちに大体釣れるから、すぐ戻っていたさあ。僕らが行った当時は、もう魚を釣りに行くではなく、魚を積みに行っている見たいだった。(笑い)。

マチ類は、もう沖縄本島の船、糸満の船、那覇の船、ああいう所からもずっと獲りに来ていたから、今では相当やられているはず。それに、今はもう道具がいいから、魚探も付いてあるし、絶対逃がさないから。もう尖閣列島では、昔見たいに釣れないかもしれない。

だけど、向こうにあんまり行ってないから魚は大分殖えて、昔のように獲れるかもしれないねえ。

10 回なら、6 回は苦勞、欲しい避難港

尖閣は潮の強い所だから波がものすごく強い。だから危ない目にあったりで、うんと苦勞した。10 回行つたとすれば、そのうち 6 回位は苦勞だ、半分以上は苦勞だった。

もう少しシケても大変だから、八重山からの北風にかかったら、宮古には上りきらん。八重山に行って、少し凪てから、そこから池間に帰ってきた時もよくあった、危ないことだけど。でもそんなしないと、食えなかった。

尖閣は冬の時期はよかったけど、港がないから危なかったからねえ。宮古からアカオまでは、大体 7,8 マイル出て 9 時間位歩くんだから、北風があつたらたいへんだった。

だから、尖閣に避難港が造って貰えるのなら最高だね。これが一番よいんじゃないか。港が出来たら小さい船でも行けるようになる、昔は3トンの船で行っていたから。

小さい船というのは、行って釣るでしょう。帰りが問題なんだよ。もし船がシケたらどうにもならない。冬に後ろから風が吹いたら、なかなか大変なんだ。これは僕の考えだがねえ、まあ避難港自体は、向こうではそんなデラックスなものは造れないはずだから、2,3隻でも4,5隻でも泊まれる位だったらいいんじゃないか。そんなに大きい物を造ってもしょうがない。向こうに10隻も20隻も泊まることは先ずないですよ。大きく造ってしまうと、向こうの波は沖と一緒にだから、港の中にまでうねりが入る可能性があるし、風も余計に入ってしまうこともある。だから規模は小さく、入口を2つも3つも造って、勢いを殺してやるような造りにすれば上等なものができると思うがねえ、どうだろうか。

この前、アカオに行った コウビトウは 是非行きたい

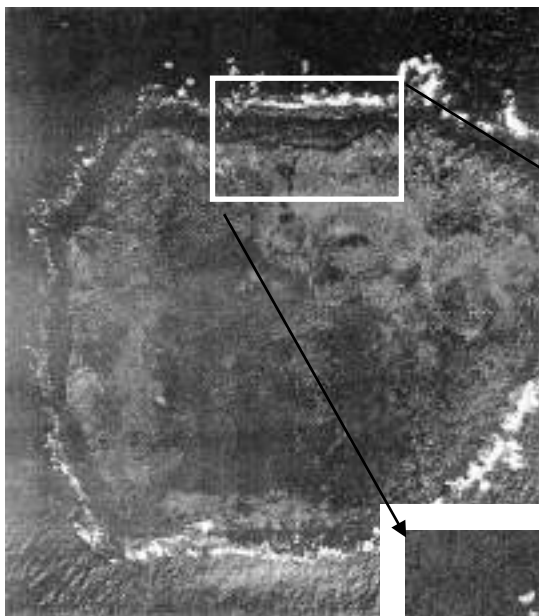
去年(2011年)の9月から10月にかけて3回、今年(2012年)は、2月は2回だったかねえ、漁協の若い年中と一緒にアカオに行ってきた。(外国漁船損害調査事業の一環として)、与那嶺正雄さんと僕と2人で、尖閣の案内役でねえ、もう2人とも80近くのオジーだが(笑い)。僕が、最後に尖閣行ったのは27,8かなあ、カズミ丸という3トンの船に乗って、だから52,3年ぶりだ。向こうはアカマチ、メンタイ、アカマチの大きいのは食うからねえ。シロタイとか、アオマチとか、あんなのが釣れた。だけど、行ったのはアカオだけ、尖閣列島には行かないですよ(笑い)。僕はコウビトウに行きたいと言ったけどねえ、向こうは海も、島もよく知っているから、コウビトウに行く時は必ず乗せてと言ってある。以前話したあの飛行機もまだあるんじゃないか、ああいうのは、なかなか腐れないし、簡単には運ぶことできないから。まだあの畑に坐っているんじゃないか、あつたらもう一度見たいし、できれば、こっちに持って来ようとも思っているさあ(笑い)。(了)



尖閣諸島アカオ(大正島)付近で操業している池間漁船
(2011年10月)

※参考資料

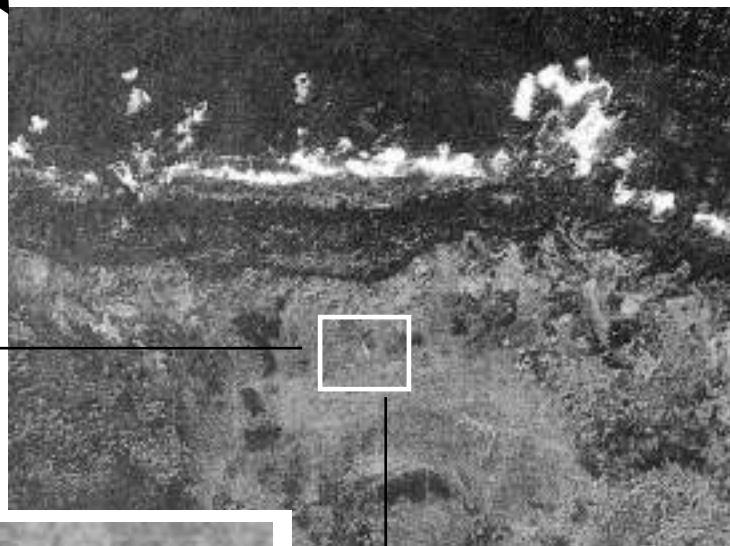
米軍の久場島の航空写真に、不時着した航空写真が写っていた！！



上：米軍の航空写真全体（撮影年不詳 沖縄県公文書所蔵）

中：白枠を拡大した写真
城枠内に飛行機が小さく見える

下：飛行機の部分を拡大



左端上のゼロ式戦闘機と比較して見ると少し異なっているのが分る。
機種は不明

川満 稔 かわみつ みのる (伊良部漁協)

1925年(昭和元年) 宮古島伊良部町で生まれる。87歳(2012年時)。

昭和18年、南方漁業開発団体に応募しシンガポール等で海外漁業、終戦帰国後は渡台し、尖閣でカジキ突きを行う。

昭和24年、宮古に戻り、尖閣へはカジキ突きで出漁。その傍ら、魚釣島に戦時中に不時着した飛行機3機と古賀村製造場のレンガを解体、スクラップ回収したという。尖閣での漁歴は23~70歳の47年余に亘る、その後沿岸イワシ漁に転じ、1昨年85歳で機関長を辞め、漁業を引退する。



追い込みで南方へ 終戦後 突船で台湾へ

戦前は、シンガポールからギルバートへ、海外漁業に行っておったよ。戦時中は追い込みで南方漁業開発団体(皇道産業焼津踐団)といってねえ、僕が18の時に国が募集しておった。海外漁業といってねえ、沖縄からも、佐良浜からも参加していたよ。

終戦になったら英軍の捕虜、岸壁の作業隊に連れ出された。昭和21年に引き揚げて、8月に宮古に戻ったけど、1年あまって台湾へ行つとる。昭和22か23だなあ。台湾へは密航船で与那国から渡った。闇船だよ、夜中に行つて下ろされて、台湾では突船に乗っていた。乗組員は下地栄さんと、伊計長英さん、源河文治さん、豊見山恵義さんの叔父さん(豊見山ナカスジヤ)、浜川太郎さん、名越三郎さんが一緒だった。下地栄さんが船長でメンバーの中心だった。浜川太郎さんは1航海にカジキを40本も突いていたよ(笑い)。

最初蘇澳(すおう)に行つて、そこで突船していたが1年して引き揚げた。もう台湾で働いてもお金送金できない。もう食べた方がいい、送金もできないから(笑い)。で、もう宮古に帰ろうと、蘇澳から基隆に移動した。それで僕らの船をチャーターして、ジャンク船が引つ張つて、水先案内させて、それで、与那国経由で宮古に帰つて来たわけよ。

もう台湾は賄賂、賄賂でねえ、一人幾らとチャーター料を決めたんだが、与那国沖でもめて、もう闇船だから港に入れない。それで台湾に引き返そうとしてから、もう1週間過ぎているからどうせ台湾に戻つても、捕まって強制送還だから、名越三郎さんと僕ら2人は行かないと反対して、皆も行かないと言って、夜中、与那国に上陸して宮古に帰つて来たわけよ(笑い)。与那国へは密貿易もした。当時砂糖は高価で一俵20万円(米軍票)位したねえ。

台湾から 尖閣へ 一週間過ぎたら 検査?

台湾にいた時には、尖閣へは2回ほど行つたよ、台湾に近い所にアジンコー(彭家嶼)といってねえ、向こうには、カジキの獲れる時期には台湾船が沢山おるよ。アジンコーで獲れない場合は尖閣に行く船もおるが、全部の船が行くわけではない。アジンコーから尖閣までは大体6、7時間かかるから。僕の乗っていた船は15馬力の焼玉エンジンで、1航海大体1週間位だった。1週間位過ぎたら検査だよ。それに引っ掛かたら強制送還だから。

だから台湾を出港して1週間以上過ぎたら、もう与那国に行つて逃げる格好でもう島に

帰るさあ(笑い)。この時は台湾に戻らなければもう何の関係もないさあ。だけど、台湾にいたら、1週間以上過ぎると市場で検査するよ、(密航の検査か?)、だから市場に行く前に途中の浜に降りて、一ヶ月ほど隠れてから、また船に乗るさあ。市場まで船に乗っていつて引っ掛かったのは何人もいたよ、もう強制送還だから。

宮古に帰り 古い小さな突船を

宮古に帰ってからは、尖閣でずっと突船やっていた。あの時の連中は僕 1人しか残っていないよ。皆、死んでないなあ。あの時の尖閣のカジキはものすごかった。マカジキとか、シロとか、クロとか、バショウとかねえ、ものすごいカジキがいたねえ。

台湾からも突船が来ていたねえ、島の連中が皆行っているわけよ。浜川義孝さんとか、佐久本昌一さんとか、長崎栄吉さん、山口銀行さん、吉浜善太郎さんとかが乗っていたねえ。あの時分僕より 3、4つ上だったからもう皆亡くなっている。台湾から来た船は大きくて上等だった。僕らの船は小さいさあ、古船で大変だった。台湾人のマルホさんから譲ってもらったニッコウ丸といって 10ト位の船だった。マルホさんは宮古にずっといて、平良で商売していたがもう亡くなったかなあ。僕がニッコウ丸の機関長して、船長は名城三郎さんだった。ニッコウ丸は 20馬力の焼き玉の古船だから、船が遅いので追いつかん。もうカジキが速かったから(笑い)。台湾船は速いからさっと行くのに、僕らの船は遅いから、突船なんかできない、もう真似だけさあ(笑い)。

台湾船は速いから、1日 20本も 25本も獲っておったよ。あっちが 25本獲るのに、もうこっちは 7本位。カジキ見ても追いきらんから、船が遅いからもう逃がしていたよ(笑い)。

クバシマ 昔の製造工場跡あった

クバシマ(魚釣島)は、僕らは突船しておった時分、沖の方を廻っていたから、あの辺のことは、昔のことはあまり分らんけど、昔ねえ、カツオ製造していた大きな製造工場跡があったよ、だから船の出入りする所は石を切られて割られてある、溝(割割)があるよ。

僕はあまり上陸しなかったけど、向こうには殆んどは皆アンカー入れて、何だかんだしておったけどねえ。でも水採りには、皆クバシマまで行っておるからねえ、水は流れている所があるさあ、北側に、で、船から行って、水は向こうから補給しておったよ。で、トリシマの方はガマ(洞窟)のタンクの水で鳥の糞で臭いんだよ。

クバシマの方は水はきれい、山からすぐ流れておるから。

終戦後も、製造が不足した時は、クバシマにねえ、カツオ船が八重山から来て、そこで製造をやっておったらしい。トリシマ(南小島)にもガマの奥行ったらタンクが造られて、コンクリーで造られていた。だから向こうでも製造しておったさあ。佐良浜からカツオ船が行ってやっておったけど、僕らが突船で廻った時分はもう製造終わっておった。エサは採れないといってもうやめたと聞いておる。

クバシマの飛行機 薪燃やして 折って

もう僕らはカツオ船に乗って、尖閣に、クバシマ行った時、日本の飛行機が3機落ちていたよ。飛行機の中に誰も死んでいなかったから、多分燃料切れで皆落ちているわけよ。不時着してねえ、翼は何々と書かれておったけど、皆助かっているわけさ。

戦時中に、向こうには降りてるわけよ。

で、あの時分はジュラルミン高いようねえ、積んで行けば高く売れるから。だが、あれをば、小さくできんでねえ。斧でも切れない。鋸でも切れないから、ジュラルミンは硬いんだなあ。骨が入るとるからねえ、それで薪拾ってきてねえ。火を燃やして曲げて折って、羽は羽で、翼は翼で、皆小さく折ってねえ、皆船に積んで来てスクラップで売って、しばらく、それを売って生活していたけどねえ(笑い)。



1940年2月大日本航空阿蘇号が魚釣島に不時着、この機体も、この時にスクラップ解体された3機の1つか（「ウェブサイト 川島氏撮影」より）

コウビトウ(久場島)にも1台、飛行機があるということは聞いていたけど、向こうまで行かなかった。誰が取ったか分からないけど。クバシマの機体は僕らが取ったよ、3機とも(笑い)。進漁丸(船主洲鎌蒲四郎 30ト)という久松のカツオ船で向こうに行って、僕の家内の親父武富金一は船長していたから、もう冬だから、皆と一緒に廻ったさあ。クバシマには薪取りに行って、薪は取らないで。飛行機を取ってきたよ。

終戦後はねえ、あの時代は、皆んな取るのも何も自由だったから(笑い)。

工場のレンガも 取ったよ

クバシマのレンガも僕らが取ったよ。あの製造工場のカマド(竈)のレンガもねえ。あれも崩して剥がして取った。レンガは当時は金だものねえ(笑い)。あの時はこっちにレンガもないわけだ。終戦後だからねえ。クバシマの製造工場は大きかったねえ、立派な石積みで囲い造ってねえ。八重山から来てやったおったか、内地から来てやったおったか、分かんが。宮古からはやってないわけだから、何だかんだ造っておったはずだから、その近くにお芋も皆生えておった。僕らは皆採って食べた、長くなるのでやっぱり水分が多くて、美味くない。住まいもあの囲いの中には、皆あったんじゃないか。



カツオ節製造工場跡、石垣囲いの内部は藨蒼と木が生い茂るまま。大規模な造りだったと想像される。(恵忠久 2002)

製造も大きなしかけでやっておっらしい。あのカツオ炊く製造カマド、石垣積まれて、レンガで上等に廻されて、さあと長いの造ってねえ、ものすごい質だったらしい。僕はどんなものだったか、見てないから分らんが、機関長で船におったから、別に崩すのも見ていない。乗組員が行ってやっておるから。飛行機取るのも、皆薪燃やして、火燃やしたら何でも潰れるから簡単だといって、飛行機取ったり、カマド崩してレンガ取ったり、あんなして皆がやっていたから。戦後は、何もないから、しょうがないから、そういうことをやっておったが(笑い)。だけど、あのカマドのレンガは残しておけばよかったねえ。

キヤーギ採りに 佐良浜からも 与那国も

向こうには佐良浜の船も、僕らの姉婿の伊波義行も何回も行ったらしいけど。キヤーギ(リュウキュウマキ)、あれを伐りには宮古から何回も行ったらしい。伊良部では家造る場合には、キヤーギは、尖閣に採りに行ったと年寄りには言っていた。僕の義兄 武富金一も、船持って行って伐ったと、言っておったよ。2,3航海行ったと、言っておったよ。僕が生まれん時じゃなかったかなあ、船乗って尖閣行って、木を伐ってきたことがあると言っておったのに。そうはず、キヤーギがいっぱいあるらしいよ。あの時与那国の連中はここに来て突船持って来て、サンゴ採ってあとはもうブラブラしていたけど、あっちへ行って根っこ皆採って来ていっていたよ。クシマヌヤーといって、キヤーギの根っこさあ、櫛もできるわけだから、ああいうものを船いっぱい積んできておった。山に登って行って、キヤーギを伐って来てから、それがいっぱいあると言っていたよ。今はもう採る人いないから。また生えてもっと大きくなっているんじゃないかねえ。

冬の尖閣 方々の船で賑わう

冬の尖閣周辺はもうカジキが少なくなって突船から、今度はもう一本釣になってねえ。そのあとはあのシマガツオ釣り変わった。シマガツオは一本釣もするが、皆曳き縄で釣っておったよ。底延縄したり、何じやかんじゃしていたよ。沖縄からも、内地からも船が集まって、もういっぱいしておったよ。内地からの船は 2,3 日したら満船して帰って行った。僕は萬生丸で行ったよ。あの時分は、日本復帰前だから、尖閣には保安庁の巡視船は来なかった。台湾船も、尖閣に来てもう一緒にやっていたよ。僕は、萬生丸では一本釣したり、底延縄したり、カツオ釣ったり、何だかんだしていた。

あの時分、尖閣行ってシマガツオ釣ってきたら、仲買人がおって、魚獲れるのが少ない時は、もう向こうで1週間も寝泊りして釣っておった。一日、4,5百キロ位だから、1トから1ト半、2ト獲ればいい方だった。

船5回造って 尖閣へ出漁

尖閣へは、3回も船造って航海したよ、ニッコウ丸、見宝丸、大生丸、萬生丸、進漁丸で。ニッコウ丸は台湾の人から貰って、大生丸は与那国から買ってきた。あれは突船だからエ

ンジン乗せ換えて漁をやっておったけど、そのあと 10トの萬生丸を造らして、これはカツオも釣るし、冬は尖閣行ったり、何じゃかんじゃしておったけど。

ある時、右翼団体が来て、僕の萬生丸をチャーターして、尖閣に乗せて行って上陸させたんだよ。あっちで灯台造るとかいて、いい金にはなったが、2回目は断った。

そのあと持った船は進漁丸といって、あれは木造船、もう木造船だからやっぱり 10年目では台割れした辺りから水漏れしてくるから、もうあれは 15、16年位は持ったかなあ。あれで尖閣も行って、ウブシユ(シマガツオ)も釣った。あの船は家内が病氣したもんだから、それに僕も足が悪くなったので、4年前に人に譲ったよ。

歳とって 沿岸イワシ漁に 切り替える

今までずっと尖閣は行っておったけど、だけど、もう歳とったから、網準備して、今は、近くで棒受け網でイワシ漁しているよ、もう、尖閣行かなくなったら、沿岸でのイワシ船に切り替えてねえ、あのマグロを釣る時にエサにするイワシよ。あのイワシを採って漁協に水揚げしておったわけ。もう 15年位はイワシ採っていたかなあ、一昨年まで、進漁丸の機関長やっていた。もう機械回す人いないから、もう足痛くて手術して、7回も手術しておるのに、もう辞めたよ。数えて 87歳にもなるのに(笑い)。

國吉守夫は船を持っておったけど、あれも尖閣で、ロープ切れて、座礁して船割って捨ててねえ、で、船なかったもんだから、僕がイワシ採りに一緒に連れて廻っておった。

僕が辞めたから今度はまた、船主が変わったから漁労長してくれと頼まれて今やっているけど。僕が譲った連中がイワシ網準備して、今日出よう、明日出ようと準備して待っているよ。あの尖閣行った進漁丸で、一日(ついたち)に出ると言うが未だ早いと思うがねえ。

(了)

※参考資料 魚釣島の飛行機残骸 散乱

1952年4月に魚釣島に上陸調査した多和田真淳は飛行機の残骸を下記のように記している。



「・・4月16日の日記の中に『しばらくしてわれわれは(魚釣島の)北海岸を巡り東海岸へ出た。東海岸は天候異変がひどいらしく3、4隻の大型発動機船が芭蕉葉の如く滅茶苦茶にされた痛々しい姿が見える。魚釣島で遭難した日本機のエンジンや翼のころがっているのもこの東海岸である。飛行機の衝突した岩は真二つに割れて黄色に染っている』。

この飛行機の残骸付近に大塊の砂岩群を縫うようにして小川が海へ注いでいるが、上流へ目をやるとついに断崖に到達するこの断崖から小川まで一筋の黄緑色の帯のようになって一種の蘚(コケ)が生えている・・・。」

(「沖縄・道しるべの島々―尖閣列島の歴史、風物と資源と」⑩ 多和田真淳 琉球新報 1970.10.14)より

※「尖閣研究 尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告

—沖縄県漁業関係者に対する聞き取り調査— 2012年」(2013年刊)

「Ⅱ聞き取り編 2章 宮古島地区 池間漁協」 前同「伊良部漁協」
より転載しました。